Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-12

アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討(1)基本的問題

谷, 冬彦

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,9(1):31-39

(Issue Date)
2001

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000451

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000451

KOBE UNIVERSITY

神戸大学発達科学部研究紀要
第9巻第1号　2001

アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討（I）
－基本的問題－

谷　冬彦*

A Critical Examination of the Ego Identity Status Paradigm. Part I
－The Basic Issues－

Fuyuhiko TANI

1．問題

Eriksonが提唱した自我同一性概念に関する操作的定義の試みは，これまでに多くなされてきたが，代表的なものとして一般に認識されているものが，Marciaによるアイデンティティ・ステイタス・パラダイムであるといえよう。アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，その発表以来30年以上にわたって，諸外国並びにわが国において，数多くの研究を生み出し，アイデンティティ研究の一つの中心的な方法として，研究者の間で認識されてきた。

しかしながら，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムには，多くの問題があることが指摘されており，これまでにその批判的検討が何度かなされている。

最初のものとしては，Bourne（1978）によるものが挙げられる。Bourne（1978）は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの構成概念的妥当性や外的妥当性の問題，理論的妥当性や弁別的妥当性の問題，アイデンティティ・ステイタス面接の信頼性の問題などを指摘している。

次に挙げられるのが，Côté & Levine（1988a）によるものである。Côté & Levine（1988a）は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，Erikson理論との一致点がごく僅かしかなく，理論から遊離していること，また，用語についてもErikson理論とは異なった用い方をしていることなどを指摘している。これに対して，Waterman（1988）がアイデンティティ・ステイタス・パラダイムを擁護する論文を書き，さらにそれに対してCôté & Levine（1988b）が反論するというように，議論となった。

そして，1999年になって，Developmental Review 誌において“Identity Formation Revisited”という特集が組まれ，再び議論がなされた。その中でもvan Hoof（1999）は，Bourne（1978）やCôté & Levine（1988a）の指摘を踏襲し，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対して非常に鋭い批判を行っている。

Bourne（1978），Côté & Levine（1988a），van Hoof（1999）たちが行っている批判は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムがErikson理論と合致していないという大まかな点においては一致しており，その点においては正当な批判として評価できよう。

さて，その一方で，谷（1999b，2000）は，Marcia（1966，1967）の初期研究において，アイデンティティ・ステイタス法の妥当性が確認できていないこと，また，Marcia（1976）の研究においては，

＊神戸大学発達科学部発達基礎論講座

（2001年4月27日　受付
2001年5月18日　受理）

アイデンティティ・ステイタス・パラダイム理論と矛盾する不合理なステイタスの移行が起こっていることなどを指摘し，Bourne（1978），Côté & Levine（1988a），van Hoof（1999）たちが論じているアイデンティティ・ステイタス・パラダイム批判とは若干異なった観点から批判を行っている。

また，谷（2001b）は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける類型論的方法に内在する本来的な問題や，Eriksonが自我同一性概念の中核として仮定する自己の一貫性・連続性や自己像に関する自他の認識の一致などには焦点が当てられていないという問題を指摘し，Erikson理論に基づいた新たなる自我同一性尺度作成の必要性を論じた。その上で，谷（2001b）は，Erikson（1950, 1959, 1968）の記述に忠実に基づき，青年期における自我同一性の感覚を，「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つの下位概念からなるものとして，それら対応する4つの下位尺度からなる多次元自我同一性尺度（MEIS）を作成し，高い信頼性・妥当性を確認している。

谷（1999b, 2000, 2001b）が指摘するアイデンティティ・ステイタス・パラダイムの問題点は，パラダイムの根底に関わる部分でありながらも，これまで明確には指摘されていないものであった。

したがって，本論文では，谷（1999b, 2000, 2001b）が指摘してきた①Marciaの初期研究の問題点，②不合理なステイタスの移行の問題，③アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける類型論的方法の問題，の3点に焦点を当て，それらの問題点をより明確に論じることを通して，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムが内包する根本的な問題を指摘することを目的とする。

2．アイデンティティ・ステイタス・パラダイム

アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの問題点を指摘する前に，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける4類型について概説しておく。

Marcia（1966）は，職業と宗教的・政治的イデオロギーに関する「危機」（crisis）と「コミットメント」（commitment）の有無という2つの基準によって，4つのステイタスを設定している。「危機」とは，職業やイデオロギーに関する選択肢について思案した時期のことを意味し，「コミットメント」とは，職業やイデオロギーに関する積極的な関与を意味する。ステイタスの類型化は，半構造化面接を通して行われる。4つのステイタスは次の通りである。

(1) 危機を過去にすでに経験し，現在コミットメントをしている「同一性達成」（identity achievement）
(2) 危機は経験している場合もあれば，していない場合もあるが，いずれにしてもコミットメントがない「同一性拡散」（identity diffusion）
(3) 現在危機を経験していて，コミットメントはあいまいだが，コミットメントしようと努力している「モラトリアム」（moratorium）
(4) 危機を経験せずに，コミットメントしている「早期完了」（foreclosure）

なお，各ステイタスは，同一性達成，モラトリアム，早期完了，同一性拡散の順で同一性のレベルが高いと仮定されている。

3．Marciaの初期研究の問題点

Marcia（1966）は，アイデンティティ・ステイタス法をはじめて公表し，その開発と妥当性の検討を行った。6つもの仮説を立てて，その方法の妥当性を確認しているが，支持されなかったものも多く，妥当性が確認されたのかは，あいまいである。しかも，各ステイタス間における諸変数の差を検討する場合，統計処理の方法としては，本来ならば分散分析の後に多重比較を行うべきところ，t検定を行っており，2つのステイタス間での平均値の検定や1つのステイタスの平均値と他の3つのステイタスをあわせた平均値の間で検定を行っている。それゆえ，そのことも結果のあいまいさの原因に

なっている。

この研究から，Marciaが仮説を支持するとした結果をまとめると，次のとおりである。

(1) 同一性達成において，概念達成課題の成績が良かった。

(2) 達成欲求の現実性は，早期完了において低かった。

(3) 早期完了において，権威主義傾向が高かった。

(4) 文章完成法によって測定された同一性の程度と自尊心の間には有意な相関があった。

(5) 同一性拡散は，文章完成法によって測定された同一性の程度が低かった。

なお，仮説に反した結果は，次のとおりである。

(a) 達成欲求の現実性は，同一性達成・モラトリアム・同一性拡散間で有意差がみられなかった。

(b) 偽情報を与えられたときの自尊心の変化は，ステイタスによって有意差はなかった。

(c) 文章完成法によって測定された同一性の程度は，同一性達成・早期完了・モラトリアム間で有意差がみられなかった。

したがって，これらの結果は，4類型を弁別する妥当性を支持するものとしては，極めて不十分である。確認されたのは，いずれか1つのステイタスが他のステイタスと比較して有意差があったというだけであり，ステイタス間で全く有意差がなかったものさえある。これらの結果からは，最初に仮定された同一性達成，モラトリアム，早期完了，同一性拡散の順で同一性のレベルが高いという連続体概念（continuum concept；Côté & Levine, 1988a, b）は，全く確認できていない。Marcia（1966）自身，同一性達成とモラトリアムの類似性や，早期完了においてほとんどの変数が最も低いことから，同一性拡散のカテゴライズの不適切さを考察の中において認めている。

さらに，Marcia（1967）は，先の研究において，自尊心の変化について期待された結果がでなかったことが，自尊心尺度を2ヶ月もの間隔をおいて施行したことにあるとして，時間的間隔を短くすることによって追試を行った。そして，不安，権威主義についても検討した。

この研究から確認された結果をまとめると次のとおりである。

(1) 同一性達成・モラトリアムは，早期完了・同一性拡散に比べ，情報による自尊心の変化が有意に低かった。

(2) 早期完了において，権威主義傾向が高いという，先行研究の結果が再確認された。

しかし，同一性の程度の低い順に不安の程度が高いだろうという仮説に全く反して，モラトリアムが最も不安が高く，他の地位においてはほとんど変わりないという結果が出ている。

この研究の（1）の結果は，仮説を支持するものであったが，同一性達成とモラトリアム，早期完了と同一性拡散を組み合わせた分析をしており，4類型の弁別性を支持するものには至っていない。また，不安についての結果は，Marciaの仮説に全く反する結果になっており，当初の4類型の設定自体が構成概念的妥当性の観点において根本的に問われなければならない。

したがって，以上のMarciaの初期の2研究からは，4類型の妥当性の確認ができたとは、とても言えない。

要するに，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，初期研究からすでに問題を抱えていた方法論であったといえよう。

ところが，それにもかかわらず，その後もMarcia（1993）は，アイデンティティ・ステイタスの構成概念的妥当性として，これら初期研究（Marcia, 1966；1967）の研究結果を示しており，不可解としか言いようがない。

4－1．不合理なステイタスの移行

アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおいて，決定的な問題点は，時系列における不合理

なステイタスの移行である。

Marcia（1976）は，すでに大学を卒業した30名の男性を対象に，アイデンティティ・ステイタス面接を行った。そして，これを6～7年前，彼らが大学生のときに受けた面接結果と比較した。その結果，学生時代に同一性達成だった者7名中3名が早期完了へ移行していた。また，モラトリアムだった者7名中2名が早期完了へ移行していた。

同一性達成・モラトリアムが早期完了に移行するというこの結果は，論理的に考えるならば，不合理としかいいようがない。なぜならば，同一性達成は，過去に危機を経験したという条件で，カテゴライズされるのにも関わらず，数年後には，危機は経験したことがないという早期完了に移行してしまっているのである。このことは，危機を経験したという過去の事実がなくなってしまったことを意味し，論理的に不合理である。

Marciaのアイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，理論的には，Waterman（1982）やCôté & Levine（1988a）が図示するように，同一性達成やモラトリアムから早期完了に移行するということがないというのが基本的前提となっている。しかし，Marcia（1976）の結果は，その基本的前提に対して反証事例を提示したものとなってしまっている。Marcia（1976）は，このことについて，アイデンティティに対するアプローチは，類型論的ではなく，プロセスを考慮すべきだということを示唆すると述べるが，全く答えになっていない。もともと，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，類型論的な仮定を持って理論化されたものであり，プロセスを考えるにせよ，Marciaが当初考えたステイタス移行に関する理論は，同一性達成やモラトリアムから早期完了に移行するということはありえないものである。本来ならば，Marcia（1966）の研究は，仮説検証型の研究であり，このような決定的な反証結果が出てきた以上，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの仮説的理論を棄却すべきである。もしも，Marciaが探索的研究としてとらえているにせよ，このような不合理な結果が出てきた以上，理論の大幅な変更を余儀なくされるであろうが，Marcia（1976）は，理論的修正について明確には何も述べていない。

いずれにせよ，Marcia（1976）における不合理なステイタス移行の結果は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの信頼性，妥当性など，方法論の根本的な誤りを示すものである。

では，なぜこのような不合理な移行が起こると考えられるのだろうか。

このことについては，いくつかの論点があるため，以下には，それぞれの観点から，その理由について論じる。

4－2．自伝的記憶の不安定さ

谷（1999b，2000）が指摘しているように，まず，第1に考えられるのは，自伝的記憶の不安定さによるものである。

大学の時代には，確かに自分は迷い，悩んで，ある一つの結論に至ったと思っていたが，数年の後には，その悩んだということを忘れてしまう。あるいは，時間がたったことによって，個人内で自伝的記憶の体制化に変化が生じ，大学時代には過去に起こったことを悩んだこととしてとらえていたが，その後においては，それは悩んだというほどの大したことではないという自伝的記憶の体制化の変化が生じたと考えることができるだろう。

佐藤（1998）は，自伝的記憶研究の立場から，自伝的記憶と自我同一性について論じる中で，加藤（1983）の同一性地位判定尺度の危機に関する項目（「私は自分がどんな人間なのか，何をしたいのかということを，かつて真剣に迷い考えたことがある。」など）を示し，次のように述べる。

“ここで気がつくのは，これらの質問に答えるときには回答者が自分の過去を振り返って，ここにあげられたような体験をしたかどうか想起しなければならないということである。従ってたとえ危機を

経験しても，時間がたつうちにその事を忘れたり，危機の程度を過小評価して想起したり，あるいは以前から終始一貫してその対象に自己投入しているように想起したなら，その人は本来は「達成」であっても「早期完了」と判定されることになってしまう。”(p. 607)

つまり，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける「危機」という変数は，過去の想起という不安定なものに依存するものであり，自我同一性の状態を類型化する変数としては，極めて不適切なのである。

また，Neimeyer & Rareshide (1991) は，アイデンティティ・ステイタスによって，自伝的記憶の在り方が異なることを示した。このことは，アイデンティティ・ステイタスの類型化は，パーソナリティ発達の様態を反映するものではなく，単に自伝的記憶の差異によってもたらされるものであることを示唆する。

いずれにせよ，Marciaパラダイムは，過去の危機の想起という自伝的記憶の不安定さを反映するものを類型化の基準として用いていることに決定的な問題があるといえるだろう。

4－3．認知心理学的観点から

Berzonsky (1988, 1989) は，Marciaの類型化を認知心理学的に情報処理という観点からとらえなおし，アイデンティティ・スタイルというパラダイムを提唱した。

Berzonsky (1988) によれば，自己探索者であるモラトリアムと達成は，意思決定とコミットメントの前に関連する情報を活発に求め，精緻化し，評価する「情報志向」である。また，早期完了は，親を中心とする重要な他者による規範的期待に注目する「規範志向」である。そして，コミットメントしていない拡散は，直接的状況の快楽的きっかけが行動の方向を決めるまで，行動遅延する傾向がある「拡散志向」であるとした。

つまり，Marciaによる4類型は，同一性の状態や発達を示すものではなく，単に情報処理スタイルの差異の問題であるとし，Marciaパラダイムにおいて，不合理な移行が起こるのは，個人の情報処理スタイルが変化するということによって生じることを指摘した。

Berzonskyの指摘は，先述した不安定な自伝的記憶の問題とも関わるものであり，実際，Neimeyer & Rareshide (1991) の研究は，Berzonskyの理論を参考にしている。

4－4．社会構築主義の立場から

Slugoski & Ginsburg (1989) は，社会構築主義の立場から，Marciaのアイデンティティ・ステイタス・パラダイムを批判している。

Slugoski & Ginsburg (1989) は，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける「危機」と「コミットメント」は，個人的で内的な過程に付随するものと考えられるのではなく，それによって個人が行為に合理性と正当性を与えるような談話もしくは発話の文化的に適切な方法として考えられるとした。

すなわち，同一性達成者は，現在の状態になるまでの間に起こった「危機」を表現できる能力があり，認知的（意図）・動機的（理由）構造の一貫性を表現できる。それゆえ，自分自身や自分の選択について話す方法によって，「行為の主体（agents)」の状態を主張できる。

それに対して，同一性拡散者は，そのような主張はできない。なぜなら，彼らはランダムな様式でしか行動をカテゴライズできないからである。この点で，同一性拡散者の行動に関する発話は意味が欠如しているだけでなく，「正当化」も欠如している。

つまり，Marciaの類型化は，その社会において，自らの行為を理解可能にし，正当化しうる発話ができるかどうかによっているに過ぎないということを，Slugoski & Ginsburg (1989) は主張している

のである 。

それゆえ，不合理なステイタスの移行は，大学環境から，それとは異なった社会環境に入ることによって，その社会的な規範的要求も変化し，説明的発話の仕方が変化したものとしてとらえることができると，Slugoski & Ginsburg（1989）は指摘している。すなわち，青年期における大学環境では，「危機」を表現できることが適切であり，規範となるものの，その後の社会的環境においてはもはや「危機」を表現することは重要なことではなくなり，規範的に要求されるものではなくなるため，「危機」を表現することがなくなる。それゆえ，同一性達成やモラトリアムから早期完了へという移行が生じるのであると説明するのである。

4－5．「危機」変数と類型設定への疑問

「危機」変数設定は，Marcia（1967）が述べているように，「父親と全く同じく，メソジストで，共和党支持者の農夫になった青年は，たとえコミットメントしていたとしても，アイデンティティを『達成した』とはいえないだろう」という「素朴な考え」に発している。この考えから，危機を経験していない「早期完了」という類型も派生するのである。しかし，このような考えは，Marciaの主観に過ぎず，「青年は迷い，悩んでこそ，発達するものである」というような素朴な発達観が単に反映されているだけのものではないだろうか。無論，たとえ主観的発想であっても，それがデータによって確証できたのならば，何の問題もない。しかしながら，先述したように，「危機」という変数設定のために，Marcia（1976）の研究に示されているような不合理な結果が出てきてしまうのである。つまり，「危機」変数設定は，「青年は迷い，悩む時期があってこそ，発達する」という「青年発達ナラティヴ」（谷，2001a）ゆえの構成物であり，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムにおける類型は，Marciaの主観的かつステレオタイプ的な青年観から，作り上げられたものとして考えられるのである。

Côté & Levine（1988a）も指摘するように，実際，Eriksonは，アイデンティティ形成には，Marciaが仮定するような「危機」が「必要」であるというようなことは，全く述べてはいない。「危機」変数の設定にしても，ステイタスの類型にしても，Marciaの主観的発想による仮説構成体に過ぎず，反証するようなデータが出された段階で棄却もしくは修正されるべきものだったのである。

5．類型論と特性論

さて，ここでは，「類型論」と「特性論」というパーソナリティ心理学における基本的観点から，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの批判的検討を行う。

アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，基本的には，4つに類型化するという点において，明らかに類型論的方法である。しかし，現代のパーソナリティ研究においては，類型論的方法に比し，特性論的方法が主流とされる。

八木（1994）によれば，類型論は，厳密に測定することではなく，直感的に理解できることを重視する。そのため，類型論は無体系であったり，分類方法に研究者の特殊性が反映し一般的とはいえず，少数の型に分けるためどちらの類型にも属さない中間の型が無視されやすいなどの問題があるとする。類型論的方法であるアイデンティティ・ステイタス・パラダイムについても，同様な問題を抱えているであろう。また，八木（1994）によれば，特性論は，人間を類型論のように質的に異なるものではなく測定値のパターンの違いとしてとらえるため，類型論のように中間の型が無視されることはない。また，類型論のように直感的な理解はできなくとも，信頼性と妥当性をもってパーソナリティを構成する特性が同定され，その諸特性の客観的測定によって個人をとらえられるのなら，特性論は類型学における単純化を免れた優れたものであるとし，特性論的手法の優位性を述べている。

また，神村（1999）は，パーソナリティの類型論的記述は，一般的・世俗的に受け入れやすいものであり，また，心理療法やカウンセリングなどの応用・実践領域の専門家でさえ，類型論志向は根強い現状があるとする。しかし，実証科学としての心理学研究においては，個々の特性をそれぞれ誤差がなるべく最小となるように数値化し，それらを総合的に評価する特性論的方法が主流であるとし，その乖離を指摘する。

Marciaのアイデンティティ・ステイタス・パラダイムが，面接を用いた臨床的な方法と言われるにせよ，実証的な方法によるパーソナリティ発達研究なのであり，粗雑な類型論的方法を敢えてとる根拠もあるとは思えない。そもそも，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，面接によるものではあるものの，すでに仮定された4つの類型に分類するものであり，個人のパーソナリティの全体像を把握しようとする個性記述的方法などとは，全く性質が異なる。つまり，面接による質的データを扱いながらも，最終的には個人差の問題を仮定された4類型に還元してしまうものに過ぎず，事例研究的な個性記述的方法とは対照的なものなのである。

谷（2001b）の多次元自我同一性尺度（MEIS）は，実証科学としてのパーソナリティ研究における特性論的立場から，自我同一性を測定しようと試みたものである。谷（2001b）は，Erikson（1950, 1959, 1968）の自我同一性の定義に関わる記述を抽出し，それに基づいて，自我同一性の感覚の構成要素を「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の４つの特性からなるものとした。MEISは，それら4特性に対応する安定した4因子構造を持ち，4次元から自我同一性の感覚を測定できる。また，内的整合性や安定性の観点から高い信頼性が確認されているとともに，基本的信頼感，自尊心などの構成概念との弁別的妥当性や，発達的観点からの構成概念的妥当性など，様々な観点から妥当性が確認されている。

さらに，谷（1999a）は，MEISを用いて，4下位尺度得点を変数としてクラスタ分析を行い，新たなる自我同一性ステイタスの類型化の試みも行っている。このように，特性論的に多次元から測定するならば，類型化も行えるのである。

そのような意味では，Marciaのアイデンティティ・ステイタス・パラダイムは，粗雑な類型論的方法をとっており，現在の実証科学としてのパーソナリティ研究の動向からも乖離していると言えるのである。

6．今後の課題

本論文では，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムの基本的問題にのみ焦点を当てて，論じてきた。それゆえ，残された問題は多い。

まず，本論文では，Bourne（1978）のアイデンティティ・ステイタス・パラダイム批判，Côté & Levine（1988a, b）とWaterman（1988）の議論，van Hoof（1999）のアイデンティティ・ステイタス・パラダイム批判を含めた1999年のDevelopmental Review 誌上における議論などを概観した上でのアイデンティティ・ステイタス・パラダイムの批判的検討はできなかった。

今後は，それらの議論を踏まえた上で，アイデンティティ・ステイタス・パラダイムが，どのような点においてErikson理論と合致していないかという問題について詳細に論じる必要があるだろう。

谷（2001b）がアイデンティティ・ステイタス・パラダイムの問題として指摘している，Eriksonが自我同一性概念の中核として仮定する自己の一貫性・連続性や自己像に関する自他の認識の一致に焦点が当てられていないという問題は，Erikson理論からの遊離に関する重大な問題の1つである。このことについては，Côté & Levine（1988a）やvan Hoof（1999）が指摘している同一性の中核としての「時間的－空間的連続性」（temporal-spatial continuity）がアイデンティティ・ステイタス・パラダイムでは無視されているという問題ともあわせて論じる必要があるだろう。

そのほかにも論ずべき事柄は多く残されているが，それらについては，稿を改めて論じることとする。

引用文献

Berzonsky, M.D. 1988 Self-theorists, Identity Status, and Social Cognition. In D. K. Lapsley, & F. C. Power, (Eds.), *Self, Ego, and Identity.* New York : Springer-Verlag. Pp.243-262.

Berzonsky, M.D. 1989 Identity style : Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescent* Research, 4, 268-282.

Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity : a review and appraisal. part I & part II. *Journal of Youth and Adolescence,* 7, 223-251 & 371-392.

Côté, J.E., & Levine, C. 1988a A critical examination of the ego identity status paradigm. *Developmental Review,* 8, 147-184.

Côté, J.E., & Levine, C. 1988b On critiquing the identity status paradigm : A rejoinder to Waterman. *Developmental Review,* 8, 209-218.

Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society.* New York : W.W. Norton & Company. (仁科弥生(訳) 1977,1980 幼児期と社会1・2 みすず書房)

Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle.* New York : W.W. Norton & Company. (小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)

Erikson, E.H. 1968 *Identity : Youth and crisis.* New York : W.W. Norton & Company. (岩瀬庸理(訳) 1973 アイデンティティ 金沢文庫)

神村栄一 1999 パーソナリティ 中島義明他(編) 心理学辞典 有斐閣 Pp.686-687.

加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.

Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology,* 3, 551-558.

Marcia, J.E. 1967 Ego-identity status : relationship to change in self-esteem, "general maladjustment" and authorianism. *Jornal of Personality,* 35, 118-133.

Marcia, J.E. 1976 Identity six years after : A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence,* 5, 145-160.

Marcia, J.E. 1993 The ego identity status approach to ego identity. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity : A handbook for psychosocial research.* New York : Springer-Verlag. Pp.3-21.

Neimeyer, G.J., & Rareshide, M.B. 1991 Personal memories and personal identity : The impact of ego identity development on autobiographical memory recall. *Journal of Personality & Social Psychology,* 60, 562-569.

佐藤浩一 1998 「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 47, 599-618.

Slugoski, B.R., & Ginsburg, G.P. 1989 Ego identity and explanatory speech. In J. Shotter, & K. J. Gergen (Eds.), Texts of identity. London : SAGE Publications. Pp.36-55.

谷 冬彦 1999a 新たなる自我同一性ステイタス類型化の試み 日本心理学会第63回大会発表論文集, 906.

谷 冬彦 1999b 間主観性と自己物語の再構成－アイデンティティとライフサイクル－ 日本青年心理学会第7回大会発表論文集, 10.

谷　冬彦　2000　青年期研究における実証と解釈－科学性と物語性の交錯－　日本心理学会第64回大会ワークショップ発表原稿（未公刊）

谷　冬彦　2001a　青年という物語－少年から大人へ－　青少年問題，48(2)，13-17.

谷　冬彦　2001b　青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成－　教育心理学研究，49，265-273.

van Hoof, A. 1999 The identity status field re-reviewed : An update of unresolved and neglected issues with a view on some alternative approaches. *Developmental Review,* 19, 497-556.

Waterman, A.S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood : An extention of theory and a review of research. *Developmental Psychology,* 18, 341-358.

Waterman, A.S. 1988 Identity status theory and Erikson's theory : Communalities and difference. *Developmental Review,* 8, 185-208.

八木保樹　1994　類型論・特性論　重野純(編)　心理学　新曜社　Pp.292-301.